

わが身と周りの人々の身を守る!

防災出前講座開設「どこへでも行きます」



(写真：Webサイトより)

ひかり新聞

共生共助の社会をめざす

2022.6.4
No.45

一般社団法人
ひかりプロジェクト

自然災害発生後、テレビのインタビュウ等で、「ここに長く住んでいるが、今までこんな経験をしたことはない」「こんなことが起こるとは想像もしなかった」など、その災害が想定外であったと話される方が多くおられます。例えば、100年に一度、遭遇する可能性があると聞かされた場合、あなたはどのように思われますか？

「一生の間に起こらないだろう。そんなに心配しなくてよい」と、以前の私は考えていました。しかし、それは間違いでした。

日本における近年の自然災害は、「阪神・淡路大震災」「東日本大震災」「平成28年熊本地震」「平成29年7月九州北部豪雨」「平成30年7月豪雨(岡山、広島)」「令和元年房総半島台風」「令和元年東日本台風」「令和2年7月豪雨(熊本)」などが発生し、人的にも物的にも甚大な被害が発生しています。

さらに、これから発生が想定されている大きな自然災害には、「首都圏直下地震」「南海トラフ地震」「富士山噴火」、また各地での「豪雨」などがあります。「南海トラフ地震」では、震度7となる可能性があるほか、関東から九州にかけての太平洋沿岸に10mを超える大津波が想定されています。こうしたことから、いつ発生するかわからない自然災害に対して、わが身を守る上で、

- ① 自然災害の知識
- ② 事前の備え
- ③ 早めの避難

これらが重要になります。

*

HPAでは、オンライン防災講座に

続いて「防災出前講座」を企画しました。オンライン防災講座では、広く防災について学びましたが、出前講座では、自然災害から、わが身と周りの人々の身を守るための知識と、「避難」行動のしかたについて、時間の経過に沿って学びます。

そして、参加者の皆さんと一緒に考え、意見交換や実習を取り入れるなど参加・体験型の講座です。

講座は、豪雨災害と地震・津波災害のいずれかを開催地周辺の災害リスクに応じて選んでいただき、さらにその地域に合わせた内容で行います。例えば、

- ① ハザードマップを用い、自宅周辺の災害リスクを確認する。避難場所を見つけて避難ルートを確認する。
- ② 土砂災害の起こりやすい地域では、どこが危ないのかを確認し、前兆現象などについても学ぶ。
- ③ 地震は、その地域に合わせ、首都直下、南海トラフ、三陸沖など、災害想定とその対処を学ぶ。

*

HPA会員の皆様には、4月上旬にお送りした、第6回定時総会報告書に「防災出前講座のご案内」を同封しましたので、開催要項など詳細については、チラシをご覧ください。

今回の出前講座は、ご希望の会場に受講者と講師が集まって、対面形式で開催する予定です。防災に関心のある方々がグループを作ってください、代表の方が「防災出前講座事務局」までお申し込みください。多くの方々のご参加をお待ちしています。

(防災出前講座事務局・橋本敏廣)

熊本地震追悼行事に参加して

届け、6年目の祈り！

藤原 眞久



4月14日午後9時26分黙とう（『熊本日日新聞』4月15日朝刊一面に掲載）

の木山仮設団地と隣の西原村小森仮設団地の2カ所のみとなった。木山仮設では220戸あるうち16戸48人が、小森仮設では5戸12人の計21戸60人が、借上げのみなし仮設でも16戸35人が今も暮らしている。

ピーク時、仮設住宅に暮らす人が県内47,800人だったのが、今は合計95人にまで減った。地震から6年経って、復興が進んだと言えるのだろうか、まだ自宅の再建ができない人々もいる。住んでいる場所の区画整理事業が終わらないため、元の土地に自宅を建てられない等、事情は様々だ。町の中心部を通る幹線の県道は4車線化の拡張工事が進められており、4年後に完了する予定。

現在、木山仮設団地の向かいにあるプレハブの益城町の仮設庁舎だが、元の



現在の木山仮設団地（220戸のうち16戸だけが使われている）

場所に新庁舎建設工事が行われており、今年度中の完成を目指している。

さて、この追悼行事は前震が起った4月14日午後9時26分と、本震発生の4月16日午前1時25分にキャンドルが灯った竹灯ろうを囲んで黙とうを捧げるのがメインだが、主なスタッフは3月から竹を切り出し、いろんな長さでカットするなど、準備を進めてきた。

14日午後3時過ぎから、約50本の竹灯ろうを並べ、そこにキャンドルをセットし、千羽鶴の飾りつけも行つた。子ども食堂で子どもたちにもふるまうカレー作りは、もっと早い時間から準備。夕方からは、たこ焼きも始めた。

テレビ局や新聞社の記者たちが集まり始め、住民の方や手伝いに来ている人たちに取材をしている。6時過ぎにはキャンドルに点火を始め、まず7時に子どもたちを中心に黙とう。

正面の長い竹には、住民の方たちが願い事やメッセージを書いている。時節柄、「ウクライナに平和を」「コロナの終息」などと書かれたものもあるが、「感謝」「助け合い」「絆」「笑顔」「愛と勇氣」など、比較的、落ち着いたメッセージが多かった。以前は「慰霊」「家の再建」「復興」など、重く切実な言葉が多かった。

夕方小雨が降り出して心配したが、なんとかもってくれた。しかし時間が経つにつれて結構冷えてくる。震災の時も寒かったそうだ。

翌15日も夕方から、キャンドルの入れ替えを行い、18時頃から点灯。この日はマスクミの方は誰も来ず、静かな

夜を迎えた。集会室の中では元の住民やボランティアも入れ替わり立ち替わり集まり、震災直後のことなど思い出話をしている。6年経って、思い出として話せる話もあるのだろう。

16日深夜の本震時刻1時25分、黙とうに参加する方は少ないかと思つたが、結構集まつてこられた。夕方冷えていたが、夜になって気温が上がって、震えることなく黙とうさせてもらった。



それぞれが願いや思いを込めてメッセージを書き込む

今回も、活動中、また合間の時間に、いろんな方と話をした。

2年前、この行事に来た時に知り合った青年が、今回も群馬県からやって来た。彼は関東の出身で、震災当時、熊本市内の営業所に転勤となって働いていたが、震災後会社を辞め、コンビニでアルバイトをしながら、ボランティアとして避難所で2年ほど手伝ったそうだ。今は地元に戻って別の会社で働いて

4月14日から16日まで、今年も益城町木山仮設団地で開かれた熊本地震追悼行事に参加した。ひかりプロジェクトからは、福岡県から3名、鹿児島県から1名と私の計4名が、準備や片付け、また子ども食堂の手伝いなどをさせてもらった。

まず、4月14日現在の仮設団地の様子を紹介する。

熊本地震の後、県内に設けられた110カ所の建設型仮設団地は、この益城町

ている。お互い2年前に会ったことを思い出し「今年もよく来たね。どうして?」と聞くと、「あの時、大変だったけど、避難所の自治会長さんや住民の方と必死になって喧嘩(けんか)諍(しやう)やりながら、いろんなことに取り組んだ充実感が忘れられなくて、今年も皆さんに会いたくて来たんです」と語ってくれた。



竹灯ろうに点灯する子どもたち

また、地震で家が全壊した方は、「ショックでしばらくはすっと横になっていた。起き上がる気もしなかった。すべてのことが面倒で、お見舞いに来てくれた方に挨拶もできず、二度三度とボランティアの人が来てくれるのだけども、つれないでほしいとまで思った。今思うと本当に情けない自分だった」と話してくださいました。今はすっかり元気を取り戻しておられるが、この間のことは当事者になってみないと分からないと思う。

私が茨城県から来たことを知ると、「遠くから、よく来てくれた。私たちの

ことを忘れず、この日に来てくれることで、どれだけ勇気づけられるかわからない」と言われる。

震災から6年経って、仮設団地に住む人たちがほとんどいなくなり、「もう、被災者向けの支援活動は終了して

熊本通

追悼の明かりだけは絶やしたくない!

移動図書館おあしす代表 橋本信一

4月14日、16日、震度7の揺れを2回観測した熊本県益城町の木山仮設団地で、「熊本地震追悼行事」を実施しました。ひかりプロジェクト会員の方々はじめ仮設団地の住民、ボランティアなど、今年もたくさんの方々のご協力を頂いて実施することができました。

もともと、この「追悼行事」は、仮設団地の自治会が主導して始まったものです。おしくなりになられた方を偲び、壊れた家の再建を願うものでした。やがて災害公営住宅が整備され、あるいは自力で自宅を再建された方々が仮設団地から離れていくと、自治会は機能しなくなり、解散しました。

しかし、この「追悼の明かりだけは絶やしたくない!」との声があがり、木山仮設団地で活動している「移動図書館おあしす」のスタッフが中心となり、元住民の方々の力も借りながら、地震発生時刻に竹灯ろうに明かりを灯し、黙とうを捧げています。

震災当時、熊本県下には、110か所の仮設団地がありました。現在、それが2か所に集約されています。残った2か所は、いずれも「移動図書館おあしす」の巡回地で、私は何か運命のような

もいんじゃないか」という声が出てくる。しかし、ここで行われている竹灯ろうを前にしての黙とうも、移動図書館にしても、それを待っている人がいる限り、たとえ形が変わろうとも続けて行く必要があると思う。

ものを感じています。

今年もたくさん報道陣が駆けつけ、新聞の全国紙をはじめ、各地の地方紙の紙面にも、竹灯ろうの写真が掲載されました。ご覧になられた方も多いと思います。

「熊本地震を忘れない」「風化させない」ためにも大切な報道ですが、一方でこの時期が近付くと、当時のことを思



『熊本日日新聞』4月15日朝刊社会面に掲載された 橋本さん(右)

い出し、体調を崩す方もいます。執拗な報道陣の質問に「もう、いや」と逃げ回る人がいるのも事実です。行事を実施する側としては、こうした方々への配慮をどうするか、ということを深く考えさせられます。

しかし、それでも気丈に「正気に戻るのに4、5年はかかりました」とインタビュウに答えている方もおられました。この方はご家族を亡くされた方で、毎年、追悼行事に参加されています。

竹灯ろうに火を灯し、犠牲になられた方々のことを祈ること、壊れた家の再建を願うことはとても大切なことだと思えます。そうした思いを大事にしながら、今後も追悼行事を開催していきたいと考えています。

期間中、子ども食堂も開設しました。学校帰りの子どもたちが集まってきて、カレーやたこ焼き、焼きそばなど、思い思いの料理をおいしく食べてもらいました。毎回、この期間中の子ども食堂には、ひかりプロジェクトから、ご支援を頂いております。感謝申し上げます。

災害は、いつ、どこで起こるかかわかりません。そのための備えをしておくことはとても大切なことです。加えて災害発生当初と、その後の支援は、変化していくものだと思います。ひかりプロジェクトの「防災講座」等で備え、さらに、様々なボランティア団体の活動の経験値を蓄積して、今後に生かすことが大事だと考えます。

私たちも6年間活動をしました。微力ながら、そこで得たものを今後に活かせたらと思います。そのためにも、今後のひかりプロジェクトの活動に期待します。よろしくお願ひします。

地震時の通電火災を防止するため、家庭で気をつけること

大規模な地震が発生したとき、電気による火災がどの程度起きているか？
「2011年東日本大震災火災等調査報告書」(日本火災学会)によると、火災原因の54%は電気によるものです。

地震時に電気ストーブや電気コンロなどの電熱器具が、家屋の倒壊や機器の転倒・落下・損壊などにより、可燃物と接触して火災となるケースの他、停電となつて、ブレーカーを切るなどの処置をせずに避難し、送電が再開される場合に発生する火災(通電火災)があります。これは避難した後の無人の建物から発生するため、気づきにくいのが特徴です。

地震時の通電火災を防止するため、家庭で気をつけることは、

(1) **グラッと来たら、スイッチを切り、プラグを抜く**

使用中の電気器具のスイッチを必ず切ることです。特にアイロン、ドライヤー、電気ストーブなどの電熱器具のプラグをコンセントから抜く。しかし、地震の揺れの最中は困難ですので、まず身の安全の確保、次に火の始末、電気器具のスイッチを切り、プラグを抜く。

(2) **電気器具の消火は消火器で**

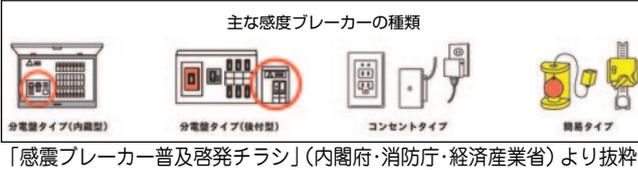
万一、電気器具が燃えた場合は、むやみに水をかけたりせず、まずブレーカーを切つて、消火器で消す。この際、消火器が電気器具の消火に適している

かどうかが表示されているので、確認する(2022年1月1日より適応表示が文字のみの旧規格の消火器は交換が必要)。

(3) **避難するときは、ブレーカーを切る**
地震が起きてても設備に異常がなければ、電気は家庭に送られます。家の外へ避難するときは、電気の消し忘れによる火災事故を防ぐため、必ず分電盤のブレーカーを切る。

しかし、外出していて、家にいないことも考えられます。その場合に有効なのが「感震ブレーカー」。規定値以上の揺れを感じると、自動的にブレーカーのスイッチを落とし、電気の供給を遮断できる装置で、次のタイプがあります。

- ① 分電盤タイプ (内臓型) ② 分電盤タイプ (後付型) ③ コンセントタイプ (埋込型)
- ④ コンセントタイプ (タップ型) ⑤ 簡易タイプ (おもり玉式) ⑥ 簡易タイプ (バネ式)。



①〜③の設置には、電気工事士による電気工事が必要です。また感震ブレーカー設置に補助金を出している自治体もあります。地震はいつ起きるか分かりません。電気による火災を防ぐため、感震ブレーカーの設置を推奨します。(参考文献: 『防災士教本』「通電火災」に関する内閣府インターネットテレビ)

防災士資格取得助成制度

ひかりプロジェクトの事業を遂行するうえで、有益な防災士資格の取得を推奨するため、正会員を対象とした助成制度があります。

お一人上限1万円ですが、希望される方は事務局までご連絡ください。

編集後記

ひかりプロジェクト第6回定時総会は、2月26日13時〜14時25分、Zoomによるオンライン形式にて開催しました。総会報告はホームページにも掲載しています。

「第9回ドリームキャンプ気仙沼大島」延期のお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大から2年半が経過しましたが、現在もお収束の目途は立っておらず、厳しい状況が続いております。

一昨年より開催を延期してきた「第9回ドリームキャンプ気仙沼大島」ですが、現在の感染状況を踏まえて、今年の開催も延期することにいたしました。どうぞご理解・ご協力の程、よろしく申し上げます。

実行委員会としましては、何よりも参加する子どもたちやそのご家族、スタッフ一人ひとりの健康と安全を最優先に考えております。また今後は、with コロナ時代のドリームキャンプの可能性も模索していきたいと考えておりますので、皆様の知見を頂きつつ、検討していきたいと思っております。

コロナ禍の中、夢や目標に向かって頑張っている学生や子どもたち、そして、それぞれの持ち場で懸命に頑張っておられる皆様に、エールをお送りします。またいつの日か、ドリームキャンプでお会いできる日を楽しみにしております。

ドリームキャンプ実行委員会 奥原 幹雄

ひかり新聞

No.45 2022年(令和4年)6月4日

発行者: 一般社団法人 ひかりプロジェクト

〒401-0304 山梨県南都留郡富士河口湖町河口1975

電話 0555-72-8191 FAX 0555-76-6696

https://www.hikari-project.org E-mail:hpa-office@hikari-project.org

(大江 靖)

今号では熊本地震6年の追悼行事を現地でのサポート活動を含め取材掲載させていただきました。私たちのことを忘れず、この日に来てくれることで、どれだけ勇気づけられるか分からない。現地の方々の素直な声だと思えます。「ひかり新聞」では、こういう現地の声、行事を主催される方の思いを大切に、皆様にお届けしていきたいと思っております。

HPAはこれからも被災地復興支援と共に、防災・減災にも積極的に取り組んでいきます。大切な命が少しでも救われるように、日頃の備えが肝要です。防災出前講座の開催をご検討いただきませう、お願いいたします。